

暁鐘の音

63

アカウンタビリティ

- Accountability -

「日本の権力構造の謎」「人間を幸福にしない日本というシステム」の著者であるカルレ・W・ウォルフレン氏は、この国の根本問題をアカウンタビリティ（説明する責任）の欠如にあると指摘しています。この言葉は先頃、筑紫哲也氏のニューズ番組で、ウォルフレン氏との対談でも取り上げられたので、耳に残っている人もいいることでしょう。

氏は一九六二年に来日して以来、オランダ紙の特派員として、また一九八二年には日本外国特派員協会の会長としてこの国を見つめてきた人でもあります。そのウォルフレン氏が、日本にはアカウンタビリティが存在しないというのです。

一般に「責任」というときはレスポンスビリティ（responsibility）の方を指しますが、これは「責任の所在」と言つときの「責任」です。

今回のTBSの問題も、結局レスポンスビリティの責任だけがあって、最終報告の場でもアカウンタビリティの責任は実践されませんでした。日本ではマスコミの最高責任者ですらアカウンタビリティが身につけていないのでしょうか。まさかウォルフレン氏を知らないはずはないでしょうし、「日本の権力構造の謎」や「人を幸福にしない国」とい

う本を読んでいないとは思えないのですが、その行動からは何も感じさせてくれませんでした。もし、マスコミのトップがこの本を読んでもいなかっただり、読んだとしてもそこからアカウンタビリティの問題を読み取れなかつたとしたら、その立場を全うすることは出来ないでしょう。

住専処理案もアカウンタビリティの欠如が如実に現れた例だし、それを阻止するための座り込みにもアカウンタビリティが見られませんか。そして反対勢力が強いと見るや、いつの間にか税金を使わない方法で決着させようとしているが、そこにもアカウンタビリティが完全に欠落しています。

振り返ってみればこの国は、ロッキード事件、イトマン事件、リクルート事件、損失補填事件等々、この種の事件が繰り返される。そこではレスポンスビリティの責任だけが問われて、アカウンタビリティの責任が置き去りにされてきました。そのことがまたこれらの事件を教訓に出来ず、性懲りもなく過ちを繰り返す結果となっています。揚げ句は、最近では長引く不況の脱出策としてパブルを再燃させよという声まで聞こえる始末です。

民主主義とアカウンタビリティは一体でもあります。少なくとも欧米で

はそのように理解されているようです。それがデモクラシーを育て、支えてきた人々の知恵なのでしょう。確かにわが国は敗戦を機に既製品のデモクラシーを与えられたのであって、国民がデモクラシーを手に入れるために血を流した訳ではありません。その上、折角の「民主主義教育」も朝鮮戦争を機に方向転換してしまつたことは既に述べました。この国には「知らしむべからず、由らしむべし」という言葉がありません。論語の泰伯編に出てくる言葉ですが、多くの政治家はこれを、政治の方針や小難しいことを一々知らせることなく、人々をその命令に従わせておけばいいという意味に解釈してきました。もちろん、この言葉は逆の解釈も出来ますし、今では間違つた解釈として認識されていますが、一旦身に付けた解釈は、なかなか抜けないようです。その上、政治家の世界に長く身を置くことで、間違つた解釈に染まっていくこともあるのでしようか。少なくともその解

釈では「アカウンタビリティ」が入る余地はありません。

ところでソフトウェア開発の世界に「ウォークスルー」というレビュー技法があります。人によってはインスペクションと呼ぶこともありませんが、レビューの形式で文書等の成果物に潜む欠陥を指摘し合つたり、内容に対して提案や助言を行うものですが、この背景にあるのは、紛れもなくアカウンタビリティなのです。そこでは欠陥として指摘されたものは訂正しなければなりません。提案や助言の場合は、それを採用するかどうかは、「担当者」自身が決めることが求められます。たとえ彼が入社二年目の経験の浅い人であっても、その部分を「担当」させた以上、決めるのは彼なのです。先輩の提案を採用するかどうかを決めるというのは、慣れないうちは決して易しくありませんし、もっと厄介なこととは、その決定を説明しなければならぬことです。どうしてその提案

を採用したか、なぜ採用しなかつたかを、メンバー全員に「説明する責任」があるのです。こうして彼はアカウンタビリティという責任を、仕事の中で身に付けていくのです。仕事の仕事そのものに、アカウンタビリティという責任を發揮する「場」が組み込まれているのです。ウォークスルーというレビュー技法があることは、多くのソフトウェア関係者は知っているのでしようが、そこにアカウンタビリティが求められていることは、意外と知られていません。そのためウォークスルーがレビューの別称としか認識されてないのが現実です。

計らずも、HIV訴訟問題で、訴訟団のシンボリック青年と菅厚生大臣は、共にウォルフレン氏の著書「人間を幸福にしない・・・」が行動の原点になっていることは、そこにこの国の問題の解決の糸口があることを示唆しているように思う。

今月の一言

熱中しなれば、面白くはならない。熱中し、うまくやれるようになる。植木屋は植木と一体になるし、大工は材木や道具と一体になる。

「真にすぐれた仕事をする人間は、**絶えずものごと**に熱中し、**骨身を惜しまず努力を続けている。偉人は、日々の周辺雑事を決しておろそかにせず、むしろ取るに足りないような問題でもそれを改善しようと力をつくす**」（サミエル・スマイルズ）

「樹医」と呼ばれる人がいる。優れた樹医になると木の呼吸が分かるという。幹に耳を当てて幹を流れる樹液の音を聞き分けるらしい。そこま

情」をしているのが見えるのではないか。森に入って鳥達と話しをする人もいる。小さな道具一つでいるんな小鳥の鳴き声を操って鳥に成り切っている。時には小鳥の方から近づいて来

とすると、面白くないから熱中しないと言つ。どんな理由でもいいから熱中することだ。その人が何に適しているかは、その人自身も知らないことであるのだから。

